

## 「二つの未来を運んだランドセル」

月館 久美子

「お母さん、ランドセル壊しちゃった。」

帰宅した私に、娘の声が飛び込んできた。あと一ヶ月で卒業式、という日だった。

本人の希望はもとより、家族や親せきの意見まで聞いて決めたランドセル。おそらく、卒業後はこのランドセルでミニチュアを作って、思い出に浸るのかなあ、なんて思っていた矢先に、次の一言が続いた。

「お母さん、ランドセル、修理してちょうだい。」

なんで？もうリュックで学校行っちゃいいよ、それに修理が間に合わない。

よくよく聞くと、ランドセルをアフガニスタンに送りたいのだということ、そのことは学校で勉強した社会の教科書で知ったということが分かった。メーカーさんに聞いてみると、ぎりぎり補償範囲以内。「卒業式に間に合いませんけど・・・。」と申し訳なさそうに言うお姉さんに事情を話し、お互いニッコリ笑顔になった。

大切に使ったランドセルはまだピカピカしていて、これから再び活躍できるのを心待ちにしているようだった。娘と一緒に、ランドセルに入れる文房具を検討し、お礼の言葉とともに、長年お世話になったランドセルに別れを告げた。

ふと、考えた。今まで娘は自分で「こうしたい」と強く主張したことがあっただろうか、大切な時は、最終的に親の意見を求めていた。ところが今回は、迷いなく「ランドセルを送りたい。」と言った。あれ、なんか今までと違う。大人への扉を少し開けたかな。

中学生になった娘は、現在忙しいながらも充実した毎日を送っている。以前は私が勧めた部活で三年間を過ごした娘は、今では自分で没頭したい部活を見つけ、自分の意思で入部して楽しんでいる。「ランドセルを送りたい。」と思った娘は、自分の未来を切り拓く力をもらった。アフガニスタンで、未来を担う子のために活躍する、ランドセルのように。